

第十三章

コード・トーンを使う ～基礎編

これまでは、マイナー・ペンター発で、シンプルなフレーズを効果的に使用する、というコンセプトでアドリブを考えてきました。このアプローチで、アドリブの入り口はぐっと広がり、敷居は随分低くなったのではないかと思います。といっても、やはりいつまでも1スケール、1フレーズというわけにもいきません。アドリブに慣れてきたら、もっと幅を広げたいのが人情です。そこで新たなアプローチとして、コード・トーンを使ったフレーズの作り方をご紹介します。

コード・トーンを使うということは、コードの変化に従って使う音のグループを変えるということです。

当然、スケール一発でアドリブするよりも、表現が豊かになります。しかしその分、使い方はデリケートに、難かしくなってきます。各コード・トーンを覚えて、実際にコードに合わせて使ってみた方がいいものの、どうしても機械的にコード・トーンを追いかけるだけになり、自然なアドリブになってくれない。そういった悩みをお持ちの方も多いでしょう（筆者の教室でも、一番多いパターンです）。

ここからは、これまでの方法を土台として、アドリブの中でコード・トーンを自然に使う方法をご説明したいと思います。

コード・トーンって何？

そもそも、「コード・トーン」とはいったい何なのでしょう？

初心者の方でも、「コード」はなんとなく分かります。しかし、「コード・トーン」と言われるといまいちイメージし辛い、という方も多いでしょう。まずはおさらいの意味も込めてコードの仕組みについてご説明します。

コードは、複数の音から成り立っています。だいたい3つか4つで、それらを同時に鳴らして演奏します。このとき、音が5つとか6つとか鳴っている場合もありますが、たいていはオクターブ上下で同じ音を重ねたりしているので、使っている音の種類はやはり3つか4つです。

この、ひとつのコードを構成している音（たち）が、「コード・トーン」です。

これをきっちりと学ぶには時間がかかるので、本書では、「A minor blues」に出てくる3つのコードをさっと説明するだけに留めたいと思います。コードの仕組みや、覚え方などをより深く学びたいという方は、拙著「ギタリストのためのハーモニー」を参照してください。